



これまでの登山・労山…そしてアルパ インクライミングのことなど No.2

ハンチントン西壁 1976年6月24日登頂
大阪府勤労者山岳連盟隊
撮影・提供・織田博志

くすのき山遊会 織田博志

ザイルを結びあうということアルパインクライミングと山岳会

私の修行時代には講習会や研修会は身近になく実践の中で学んでいきました。社会人として年間百日間の山行に出かけていました。日常生活、エンゲル係数ならぬアルパイン係数は高い数字を示し、アルパインクライミングが私の青春の証明となりました。

凍稜会では、理解し易いリーダー論がありました。ザイルを結びあいトップに立ちリードする者がリーダーだということです。ザイルを結びあう仲間とは全て五画であり対等です。お互いの命を守りあうんだとの心意気です。アルパインクライミングでは2人もしくは3人がひとつの単位、凍稜ではザイルシャフトと呼んでいました。イタリア、レッコの仲間達、ボナティ、オッジョニイ、ヨズヴェの語る「魂の触れ合い」が理想でした。

私は初山行から常にザイルのトップに立ちリードしました。凍稜会で19歳でサブリーダー、21歳でリーフリーダー、26歳

で代表を務めました。31歳で全ての役職を退きました。次のリーダーを育てバトンを手渡していきました。リーダーは人を後継を育てるからリーダーなんだと思っていました。私の凍稜会での前へ出て行なう活動はそこで終わりました。

73年の欧州アルプス行は、私にアルパインクライミングの楽しみかた、内在する危険と恐怖、目標を明確に教えてくれました。まさに山々が教えてくれました。6月から8月にかけて長期の滞在です。シャモニのロジュールキャンプ場は今では考えられないほど広大で野球ゲームが何組もできる気持ちの良い所でした。凍稜会、岡島先輩、城東登攀クラブ、三崎さんが先発し、私は後発でシャモニへ入りました。山学同志会、小川さん、小西さんなど毎年のように通い三大北壁以上に難しいモンブランイタリア側の登攀に成功していました。この年はエベレスト南壁へ第Ⅱ次RCC隊が挑んだことで記憶に残る年でした。ドリユを

はじめ 30 ピッチを越えるルートをリードし続けました。リードを交替しながら登攀するツルベ式でグレポン東壁を関西クライマーズクラブ森田さん（後立山不帰Ⅱ峰東壁下部、上部冬季初登攀）、モンブラン・タキユール北東壁を広島山岳会、藤井さん（後にカンピレ・ディオール峰初登頂）と登攀した。キャンプ場で世界中からやってくる若いアルパインクライマー達に情熱あふれる人達に出会った事が、井の中の蛙大海を知らず、私に大きな刺激を与え眼を開

かせてくれました。アルプスで挑戦する課題を見つけ毎年のようにシャモニへ来る若人達、10本20本、100本と登り込んでいく修行時代、これが大事です。私も同じように通いました。アルプス氷河にそびえ立つ岩壁と氷と雪に守られた山々をザイルを結びあい登攀していく、アルパインクライミング。レビュファのいう「天と地のあいだに、アルプスの山々とアラスカの山々が私の修行時代でした。

アルパインクライミングについて考察

英国の山岳会をアルパインクラブというようにアルプスといえば欧州アルプスです。アルプスで行われている登攀がアルパインクライミングです。ザックに必要なものを詰め担荷し、一撃で登攀する事をアルパインスタイルと呼んでいます。トレイルや道標のある領域は、ハイキング、トレッキングです。高山植物や氷河の山々を眺め素晴らしい1日を楽しめます。

アルパインクライミングの領域ではアプローチの氷河はクレバス、セラック、スノーブリッジ崩壊など多くの危険があります。転滑落を防ぐ意味でもザイルを結びあって行動します。タイトロープというガイドが使う技術です。発達した氷河のない日本では、冬や春の季節が日本アルプスに氷河と似た環境をつくってくれます。この事から私達は冬季登攀を中心に年間計画を立てていました。冬季登攀は、アプローチのラッセルから始まり忍耐力、技術、頂上を越えていくんだという強い意志が要求されます。アプローチの良い、人の集まる営業小屋のある山域、例えば八ヶ岳の冬季登攀などは除外します。冬の風邪のあたる入門編には良いと思います。それと凍稜会で育った私には先輩達の流儀がとても気に入っています。私達の流儀は当たり前のことですがノンデポ、ノンサポートです。こ

れを守らないと強いクライマーになりません。凍稜会の中でザイルを結びあって登り込み、練磨し信頼や友情を育んできました。自分たちで担荷し登り続け、食料や燃料のデポジットはしない、会の別動隊によるサポートは受けない事、これが私達の流儀です。冬季登攀するルートや岩壁をあえて無雪期に登らず、現代でいえばオンサイトをめざしました。あえて情報に蓋をして地図だけの情報で登攀する事、これも面白かったです。企業ではありませんから結果を求めるあまり云々にならないようにしないとなかなか実力は身につかないようです。

アルパインクライミングの魅力は何といっても下界と隔絶された地での鋭鋒の岩と雪、氷の登攀です。国内の冬壁、アラスカ、アルプスを登り込んでいく過程で先輩達の「織田君、死ぬような危険な目に何度もあって生き残れたなら生涯記念になる山に自分のルートが出来上がっているよ。」が励みでした。

私は凍稜会の代表を辞めてから、今まで以上に会以外の組織で活動することになりました。日本アルパインガイド協会、日本山岳会、文部省登山研修所、RCCⅡなど多くの実力ある人達と出会い山へ行きました。新たな努力、思索、工夫、鍛練を続けました。